

御文委しく承り候。法華經の御ゆへに已前に伊豆国に流され候ひしも、かう申せば謙らぬ口と人はおぼすべけれども、心ばかりは悦び入って候ひき。無始より已来、法華經の御ゆへにまこと 実そらごと にても虚事とが にても科いかに に当たるならば、争いかに でかかゝるつたなき凡夫とは生まれ候べき。一端はわびしき様なれども、法華經の御為なればうれしと思ひ候ひしに、少し先生せんじょう の罪は消えぬらんと思ひしかども、無始より已来の十悪・四重・六重・八重・十重・五無間・誹謗正法・一闍提いっせんたい の種々の重罪、大山より高く、大海より深くこそ候らめ。五逆罪と申すは一逆を造る、猶一劫無間の果を感ず。

一劫と申すは人寿八万歳より百年に一を滅じ、是くの如く乃至十歳に成りぬ。又十歳より百年に一を加ふれば、次第に増して八万歳になるを一劫と申す。親を殺す者此程の無間地獄に墮ちて、隙ひま もなく大苦を受くるなり。法華經誹謗の者は心には思はざれども、色にも嫉ねた み、戯たわむ れにも訾そし 程ならば、經にて無けれども、法華經に名を寄せたる人かる を輕しめぬれば、上の一劫を重ねて無数劫、無間地獄に墮ち候と見えて候。不輕菩薩を罵り打ちし人は始めこそさありしかども、後には信伏隨從して不輕菩薩を仰ぎ尊ぶ事、諸天たいしやく の帝あび 釈あび を敬ひ、我等が日月を畏るゝが如くせしかども、始めそし 訾りし大重罪消えかねて、千劫大阿鼻地獄に入つて、二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

五逆と謗法とを病に對すれば、五逆は霍亂かくらん の如くして急に事を切る。謗法は白癩病の如し、始めは緩やかに後漸々に大事なり。謗法の者は多くは無間地獄に生じ、少しは六道に生を受く。人間に生ずる時は貧窮下賤等、白癩病等と見えたり。日蓮は法華經の明鏡みやう をもて自身に引き向かへたるに都てくもりなし。過去の謗法の我が身にある事疑ひなし。此の罪を今生に消さずば未来に争でか地獄の苦をば免まぬが るべき。過去遠々の重罪をば何いかに にしてか皆集めて今生に消滅して未来の大苦を免れんとかんが 勘へしに、当世時に当たつて謗法の人々国々に充満せり。其の上国主既に第一の誹謗の人たり。此の時此の重罪を消さずば何いつ の時をか期こ すべき。日蓮が小身を日本国に打ち覆ふてのゝしらば、無量無辺の邪法の四衆等、無量無辺の口を以て一時に訾そし るべし。爾そ の時に国主は謗法の僧等が方人かたうど として日蓮を怨み、或は頸を刎ね、或は流罪に行なふべし。度々かゝる事出来せば無量劫の重罪一生の内に消えなくわだ んと謀たが てたる大術少しも違ふ事なく、かゝる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動もすれば悔ゆる心有りぬべし。日蓮だにも是くの如く侍るに、前後も弁わきま へざる女人などの、各おの 仏法を見ほどかせ給はぬが、何程か日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりしに、案に相違して日蓮よりも強盛の御志どもありと聞こへ候は偏ひとえ に只事ただごと にあらず、教主釈尊おのおの の各の御心に入り替はらせ給ふかと思へば感涙押さへ難し。妙楽大師の釈に云はく記七 「故に知んぬ、末代一時も聞くことを得、聞き已お はつて信を生ずる事しゆくしゆ 宿種うん なるべし」等云云。又云はく弘 「運像末に在りて此の真文をみ 矚

る宿妙因を殖ゑたるに非ざれば実に値ひ難しと為す」等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年此を祕し給ふのみにあらず、迹門十四品に猶是を抑へさせ給ひ、寿量品にして本果本因の蓮華の二字を説き顕はし給ふ。此の五字をば仏、文殊・普賢・弥勒・薬王等にも付嘱せさせ給はず、地涌の上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩等を寂光の大地より召し出だして此を付嘱し給ふ。儀式たゞ事ならず、宝浄世界の多宝如来、大地より七宝の塔に乗じて涌現せさせ給ふ。三千大千世界の外に四百万億那由他の国土を浄め、高さ五百由旬の宝樹を尽一箭道に殖ゑ並べて、宝樹一本の下に五由旬の師子の座を敷き並べ、十方分身の仏尽く来たり坐し給ふ。又釈迦如来は垢衣を脱いで宝塔を開き多宝如来に並び給ふ。譬へば青天に日月の並べるが如し。帝釈と頂生王との善法堂に在すが如し。此の界の文殊等、他方の観音等、十方の虚空に雲集せる事、星の虚空に充滿するが如し。此の時此の土には華嚴經の七处八会、十方世界の台上の盧舎那仏の弟子、法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵等の十方刹土塵点数の大菩薩雲集せり。方等の大宝坊雲集の仏菩薩、般若經の千仏・須菩提・帝釈等、大日經の八葉九尊の四仏・四菩薩、金剛頂經の三十七尊等、涅槃經の俱尸那城へ集会せさせ給ひし十方法界の仏菩薩をば、文殊・弥勒等互ひに見知して御物語是ありしかば、此等の大菩薩は出仕に物狎れたりと見え候。今此の四菩薩出でさせ給ひて後、釈迦如来には九代の本師、三世の仏の御母にておはする文殊師利菩薩も、一生補処とのゝしらせ給ふ弥勒等も、此の菩薩に値ひぬれば物とも見えさせ給はず。譬へば山がつが月卿に交はり、猿猴が師子の座に列なるが如し。此の人々を召して妙法蓮華經の五字を付嘱せさせ給ひき。付嘱も只ならず十神力を現じ給ふ。釈迦は広長舌を色界の頂に付け給へば、諸仏も亦復是くの如く、四百万億那由他の国土の虚空に諸仏の御舌、赤虹を百千万億並べたるが如く充滿せしかば、おびたゞしかりし事なり。是くの如く不思議の十神力を現じて、結要付嘱と申して法華經の肝心を抜き出だして四菩薩に譲り、我が滅後に十方の衆生に与へよと懇勸に付嘱して、其の後又一つの神力を現じて、文殊等の自界他方の菩薩・二乗・天人・竜神等には一經乃至一代聖教をば付嘱せられしなり。本より影の身に随つて候様につかせ給ひたりし迦葉・舍利弗等にも此の五字を譲り給はず。此はさてをきぬ。文殊・弥勒等には争でか惜しみ給ふべき。器量なくとも嫌ひ給ふべからず。方々不審なるを、或は他方の菩薩は此の土に縁少なしと嫌ひ、或は此の土の菩薩なれども娑婆世界に結縁の日浅し、或は我が弟子なれども初発心の弟子にあらずと嫌はれさせ給ふ程に、四十余年並びに迹門十四品の間は一人も初発心の御弟子なし。此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主釈尊の御弟子として、初発心より又他仏につかずして、二門をもふまざる人々なりと見えて候。天台の云はく「但下方の発誓を見る」等云云。又云はく「是我が弟子なり、応に我が法を弘むべし」等云云。妙楽の云はく「子父の法を弘む」等云云。道暹云はく「法是久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云。此の妙法蓮華經の五字をば此の四人に譲られ候。

而るに仏の滅後正法一千年・像法一千年・末法に入って二百二十余年が間、月氏・漢

土・日本・一閻浮提いちえんぶだいの内に、未だ一度も出でさせ給はざるは何なる事にて有るらん。正しく譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は、仏の滅後四百五十年まで此の土におはして、大乘經を弘めさせ給ひ、其の後も香山・清涼山より度々来たつて大僧等と成つて法を弘め、藥王菩薩は天台大師となり、觀世音は南岳大師と成り、彌勒菩薩は傳大士ふだいしとなれり。迦葉か・阿難等は仏の滅後二十年・四十年法を弘め給ふ。嫡子として譲られさせ給へる人の未だ見えさせ給はず。二千二百余年が間、教主釈尊の繪像・木像を、賢王・聖主は本尊とす。然れども但小乘・大乘・華嚴・涅槃・觀經・法華經の迹門・普賢經等の仏、真言大日經等の仏、宝塔品の釈迦多宝等をば書けども、いまだ壽量品の釈尊さんじしよじやは山寺精舎にましまさず。何なる事とも量りがたし。釈迦如来は後五百歳と記し給ひ、正像二千年をば法華經流布の時とは仰せられず。天台大師は「後の五百歳遠く妙道うらおに沾はん」と未來に譲り、傳教大師は「正像稍過ぎ已はつて末法太だ近きに有り」等と書き給ひて、像法の末は未だ法華經流布の時ならずと我と時を嫌ひ給ふ。さればを推量しはかるに、地涌千界の大菩薩は釈迦・多宝・十方の諸仏の御譲り御約束むなもだしを空しく黙止て、はてさせ給ふべきか。

外典の賢人すら時を待つ、郭公ほととぎすと申す畜鳥は卯月・五月に限る。此の大菩薩も末法に出づべしと見えて候。いかんと候べきぞ。瑞相と申す事は内典・外典に付いて必ず有るべき事の先に現ざるを云ふなり。蜘蛛かゝて喜び事来たり、鴉鵲かんじやく鳴いて客人来たると申して、小事しるしすら驗先に現ず、何に況んや大事をや。されば法華經序品の六瑞は一代超過の大瑞なり。涌出品は又此には似るべくもなき大瑞なり。故に天台の云はく「雨の猛きを見ては竜の大きなる事を知り、華の盛んなるを見ては池の深き事を知る」と書かれて候。妙樂の云はく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を知る」云云。今日蓮も之を推して智人の一分とならん。去ぬる正嘉元年本歲八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年本歲七月四日の大彗星。此等は仏滅後二千二百余年の間未だ出現せざる大瑞なり。此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給ふべき先瑞なるか。尺の池には丈の浪なみたゞず、驢吟ずるに風鳴らず、日本国の政事乱れ万民歎くに依つては此の大瑞現じがたし。誰か知らん、法華經の滅不滅の大瑞なりと。

二千余年の間悪王の万人に訾そしらるゝ、謀叛の者の諸人にあだまるゝ等。日蓮が失もなきに高きにも下きにも、罵詈毀辱・刀杖瓦礫等ひまなき事二十余年なり、唯事にはあらず。過去の不輕菩薩の威音王いおんのうぶつの末に多年の間罵詈せられしに相似たり。而も仏彼の例を引いて云はく「我が滅後の末法にも然るべし」等と記せられて候に、近くは日本、遠くは漢土等にも、法華經の故にかゝる事有りとはいまだ聞こえず。人は悪んで是を云はず。我と是を云はゞ自讚に似たり、云はずば仏語を空しくなす過あり。身を輕んじて法を重んずるは賢人にて候なれば申す。日蓮は彼の不輕菩薩に似たり。国王の父母を殺すも、民が考妣ちちははを害するも、上下異なれども一因なれば無間におつ。日蓮と不輕菩薩とは、位の上下はあれども同業なれば、彼の不輕菩薩成仏し給はゞ日蓮が仏果疑ふべきや。彼

は二百五十戒の上慢の比丘ののしに罵ざんそられたり。日蓮は持戒第一の良觀ざんそに讒訴むしゅこうせられたり。彼は帰依ごうあびごくせしかども千劫阿鼻獄ふびんにおつ。此は未だ渴仰むしゅこうせず。知らず、無むしゅこう数劫へをや経へんずらん、不便ふびんなり不便ふびんなり。

疑ぎつて云はく、正嘉の大地震等の事は、去ぬる文応元年太歲庚申七月十六日宿屋の入道に付けて、故最明寺入道殿へ奉る所の勘文立正安国論には、法然が選択せんせつに付いて日本国の仏法を失ふ故に、天地いか瞋ほんぎやくりをなし、自界しんびつ叛逆はんぎやく難しんびつと他国侵逼かんが難起かんがこるべしと勘かんがへたり。此には法華經の流布すいすべき瑞すいなりと申す。先後の相違しんべつ之有るか如何。答へて云はく、汝能よく之を問もんへり。法華經の第四に云はく「而も此の經は如来現在なのおんしつにすら猶い怨嫉い多し、況いんや滅度の後をや」等云云。同第七に況滅度後を重ねて説いて云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に閻浮提えんぶだいに広宣流布せん」等云云。仏滅後たおんの多怨たおんは後五百歳くほんだに妙法蓮華經の流布せん時と見えて候。次下に又云はく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼」等云云。行満座主伝教大師を見て云はく「聖語く朽くちず今此の人に遇あへり。我披閱する所の法門日本国の阿闍梨あに授与あす」等云云。今も又是くの如し。末法の始めに妙法蓮華經の五字を流布して日本国の一切衆生が仏の下種を懷妊あすべき時なり。例せば下女が王種を懷妊あすれば諸女いか瞋いかりをなすが如し。下賤の者に王頂の珠を授与あせんに大難来たらざるべしや。一切世間多怨難信の經文是なり。涅槃經に云はく「聖人に難を致せば他国より其の国を襲いふ」云云。仁王經も亦復是くの如し。日蓮をせめていよいよ弥いよいよ天地四方より大災雨の如くふり泉の如くわき浪の如く寄せ来たるべし。国の大蝗虫おおいなむしたる諸僧等・近臣等が日蓮を讒訴ざんそする弥いよいよ盛いよいよんならば、大難倍ますます来たるべし。帝釈あなばだつたりゅうを射る修羅は箭や還かえつて己が眼にたち、阿那婆達多あなばだつたりゅう竜りゅうを犯あさんとする金翅鳥こんじは自ら火を出だして自身焼をやく。法華經を持つ行者は帝釈・阿那婆達多竜えらんに劣るべきや。章安大師の云はく「仏法を壊乱えらんするは仏法の中の怨いつわなり、慈無くして詐いつわり親いつわしむは即ち是彼が怨いつわなり」等云云。又云はく「彼が為に悪を除くは即ち是彼が親いつわなり」等云云。

日本国の一切衆生は法然が捨閉閻拋しゃへいかくほうと禅宗が教外別伝との誑言きょうげべつてんに誑おうげんかされて、一人もなく無間大城むけんに墮かんがつべしと勘かんがへて、国主万民を憚はばからず、大音声を出だして二十余年が間よばはりつるは、竜逢りゅうほう・比干ひかんの直臣にも劣るべきや。大悲千手觀音の一時に無間地獄の衆生を取り出だすに似たるか。火の中の数子を父母が一時に取り出ださんと思ふに、手少なければ慈悲前後有るに似たり、故に千手・万手・億手ある父母いまにて在すなり。爾前の経々は一手・二手等に似たり。法華經は「一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」と、無数手の菩薩是なり。日蓮は法華經並びに章安の釈の如くならば、日本国の一切衆生の慈悲の父母なり。天高けれども耳疾とければ聞かせ給めふらん。地厚けれども眼早ければ御覽あるらん、天地既すてに知ろし食めしぬ。又一切衆生の父母を罵詈めりするなり、父母を流罪するなり。此の国此の両三年が間の乱政は先代にもきかず、法に過ぎてこそ候へ。

抑そもそも悲母の孝養の事、仰つかせ遣つかはされ候。感涙げんじゅう押さへ難し。昔元重等の五童は五郡の異姓の他人なり。兄弟の契ちぎりをなして互ちぎひに相背ちぎかざりしかば、財三千を重ねたり、我

等親と云ふ者なしと歎きて、途中に老女を儲けて母と崇めて、一分も心に違はずして二十四年なり。母忽ち病に沈んで物いはず。五子天に仰ひて云はく、我等孝養の感無くして母もの云はざる病あり。願くは天孝の心を受け給はゞ、此の母に物いませ給へと申す。其の時に母五子に語って云はく、我は本是太原の陽猛と云ふものゝ女なり、同郡の張文堅に嫁す、文堅死にき。我に一の児あり、名をば烏遺と云ひき。彼が七歳の時、乱に値ひて行く処をしらず。汝等五子に養はれて二十四年此の事を語らず。我が子は胸に七星の文あり、右の足の下に黒子ありと語り畢つて死す。五子葬りをなす途中にして国令の行くにあひぬ。彼の人物記する囊を落とせり。此の五童が取れるになして禁め置かれたり。令来たつて問うて云はく、汝等は何くの者ぞ。五童答へて云はく、上に言へるが如し。爾の時に令上よりまろび下りて天に仰ぎ地に泣く。五人の縄をゆるして我が座に引き上せて物語して云はく、我は是烏遺なり。汝等は我が親を養ひけるなり。此の二十四年の間多くの楽しみに値へども、悲母の事をのみ思ひ出でて楽しみも楽しみならず。乃至大王の見参に入れて五県の主と成せりき。他人集つて他の親を養ふに是くの如し。何に況んや同父同母の舎弟妹女等がいううたるを顧みば、天も争でか御納受なからんや。

淨蔵・淨眼は法華經をもて邪見の慈父を導き、提婆達多は仏の御敵、四十余年の経々にて捨てられ、臨終悪くして大地破れて無間地獄に行きしかども、法華經にて召し還して天王如来と記せらる。阿闍世王は父を殺せども仏涅槃の時法華經を聞いて阿鼻の大苦を免れき。

例せば此の佐渡国は畜生の如くなり。又法然が弟子充滿せり。鎌倉に日蓮を悪みしより百千万億倍にて候。一日も寿あるべしとも見えねども、各御志ある故に今まで寿を支へたり。是を以て計るに、法華經をば釈迦・多宝・十方の諸仏・大菩薩、供養恭敬せさせ給へば、此の仏・菩薩は各々の慈父慈母に日々夜々十二時にこそ告げさせ給はめ。当時主の御おぼえのいみじくおはするも、慈父慈母の加護にや有らん。兄弟も兄弟とおぼすべからず、只子とおぼせ。子なりとも梟鳥と申す鳥は母を食らふ。破鏡と申す獣の父を食らはんとうかゞふ。わが子四郎は父母を養ふ子なれども悪しくばなにかせん。他人なれどもかたらひぬれば命にも替はるぞかし。舎弟等を子とせられたらば今生の方人、人目申す計りなし。妹等を女と念はゞなどか孝養せられざるべき。是へ流されしには一人も訪ふ人もあらじとこそおぼせしかども、同行七八人よりは少なからず。上下のくわても各の御計らひなくばいかゞせん。是偏に法華經の文字の各の御身に入り替はらせ給ひて御助けあるとこそ覺ゆれ。

何なる世の乱れにも、各々をば法華經・十羅刹助け給へと、湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり。事繁ければとゞめ候。

日蓮花押